

## 高等学校芸術科(美術)の鑑賞題材における 〔共通事項〕を位置づけた指導に関する検討

— 造形の要素などを実感的に理解するための課題設定に着目して —

竹 内 晋 平 奈良教育大学美術教育講座(美術科教育)

## Teaching by Using “Common Items” as Art Appreciation Subjects in High School Art (Art and Design):

A Focus on Setting Learning Topics for a Realistic Understanding of Modeling Elements

Shimpei TAKEUCHI

(Department of Fine Arts Education, Nara University of Education)

### Abstract

In March 2018, the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology (MEXT) published new curriculum guidelines for high schools. These revisions stem from demands for greater clarification with regard to the qualities and capabilities that should be developed through learning activity. Notably, these amendments set the creation of “common items” for teaching in music, arts, craft, and calligraphy in high school art departments.

This paper aims to identify the ideal instructional guidance using these common items that should be developed so students can be accorded a realistic understanding of modeling elements. The research methodology employed for the study includes an overview of prior research relating to instructions in junior high school art using common items. A review of extant literature helps to explore various scholarly perspectives and to ascertain the current state of teaching methods appropriate for high school art classes. A comparative view is also obtained by referring to the art modules previously published in 2017 for junior high schools. Specifically, in an attempt to study five items related to the modeling elements of which students should ideally have a realistic understanding, the folding screen artwork “Pine Trees (*Shorin-zu Byobu*)” by early modern Japanese artist Tohaku Hasegawa was indicated as an example of an artwork that should be viewed by students.

キーワード：高等学校芸術科(美術),  
〔共通事項〕,  
造形の要素,  
実感的な理解

Key Words: High School Art (Art and Design),  
Common Items,  
Modeling Elements,  
Realistic Understanding

### 1. 序

#### 1.1. 研究の背景

平成30年3月、文部科学省より新たな高等学校学習指導要領が公示された。今回の改訂によって、各教科の学習において育成を目指す資質・能力は、これまで以上に明確化することが求められたといえよう。改訂に先立っ

て平成28年12月に示された中央教育審議会からの答申には、「何を理解しているか、何ができるか(生きて働く「知識・技能」の習得)」<sup>(1)</sup>、「理解していること・できることをどう使うか(未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成)」<sup>(2)</sup>、「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか(学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養)」<sup>(3)</sup>

という、いわゆる「資質・能力の三つの柱」が明記され、高等学校芸術科(美術)の改訂においてもこれらを踏まえた目標や内容の再整理がすすめられてきたところである。

高等学校芸術科の学習指導要領改訂に関しては、音楽・美術・工芸・書道のそれぞれに〔共通事項〕が新設されたことが特筆される。平成20年の学習指導要領改訂で、小学校の音楽と図画工作、および中学校の音楽と美術にそれぞれ〔共通事項〕が位置づけられてから、10年を経たの新設である。図画工作科や美術科での〔共通事項〕に関連した授業実践例等に関する報告や論考は蓄積されつつあるが、高等学校芸術科(美術)における〔共通事項〕の指導については、今後の研究開発が望まれている状況である。

## 1. 2. 研究の目的と方法

そこで本研究では、高等学校芸術科(美術)の学習において生徒が造形の要素などを実感的に理解するためには、どのような〔共通事項〕の指導を展開することが望ましいのかを明らかにすることを目的とした。

検討の方法としては、中学校美術における〔共通事項〕について論じた先行研究群を概観するとともに、平成29年に先行して公示された中学校学習指導要領(美術)における記述を参照することを通して、高等学校芸術科(美術)に求められる指導のあり方や視点を探ることを試みる。その上で、長谷川等伯(1539-1610)による「松林図屏風」(国宝、紙本墨画、六曲一双、東京国立博物館蔵)に含まれる造形の要素を抽出し、〔共通事項〕との関連について検討する。実見に基づいた「松林図屏風」の分析を通して、生徒が造形の要素など捉えることを実感的に理解するための学習課題についての具体的な提案を行いたいと考えた。

なお本稿においては以下、「高等学校芸術科(美術)」を「高等学校美術」と略記することとする。

## 2. 先行研究の動向と本研究の枠組み

前述のように、平成20年に告示されて約10年を経た中学校学習指導要領(美術)における〔共通事項〕を位置づけた指導に関しては、いくつかの先行研究がすでに報告されている。

福田隆眞・福田哲郎・西村優子による論考では、〔共通事項〕は「具体的な色や形を意識しながら児童生徒のそれぞれのイメージを形成するための方法であり、手段である」<sup>(4)</sup>と述べられている。中学校美術の実践報告において鑑賞題材をとりあげ、生徒に作品に含まれる色・形に着目させ、そのことを通して生徒がそれらから何をイメージし、何を考えたのかについて詳細に分析していることが特筆される。また、福田隆眞・足立直之・中野

寿美・楊井朋子・阿部萌の論文においては、「美術科における学びを『感覚』的なものや技能習得にとどめず、子どもの『思考』に焦点を当てた」<sup>(5)</sup>と、中学校美術における〔共通事項〕の位置づけについて評している。福田・足立らによる、美術科における学力観から〔共通事項〕を捉えようとする論点は、〔共通事項〕が美術科における「基礎・基本」および「内容」(A表現・B鑑賞)との関連が強い<sup>(6)</sup>とする長谷川昇の論考とも関連するといえる。

これら先行研究群における言説を概観すると、〔共通事項〕を位置づけた指導を行うことによって、造形の要素などをめぐる生徒の感覚やイメージを豊かにすることが主張されていると解釈される。本研究においては、これら先行研究で示唆された意義に立脚しながらも、高等学校美術の指導において生徒が実感的に理解できるように配慮することが望ましい事項を設定し、それらを具体的に個別の鑑賞作品と照合することを試みる。このため次章では、新学習指導要領(中学校美術および高等学校美術)における〔共通事項〕の位置づけについての確認を行いたい。

## 3. 新学習指導要領に記載された〔共通事項〕

高等学校学習指導要領および中学校学習指導要領において、〔共通事項〕に関してどのように記述されたのかについて確認しておきたい。表1に示しているのは、学

表1 学習指導要領(中学校美術及び高等学校美術)における〔共通事項〕の比較<sup>(9)</sup>

<p><b>中学校美術(第1学年、第2学年及び第3学年)</b> 〔共通事項〕</p> <p>(1)「A表現」及び「B鑑賞」の指導を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。</p> <p>ア 形や色彩、材料、光などの性質や、それらが感情にもたらす効果などを理解すること。</p> <p>イ 造形的な特徴などを基に、全体のイメージや作風などで捉えることを理解すること。</p>
<p><b>高等学校美術(Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ)</b> 〔共通事項〕</p> <p>表現及び鑑賞の学習において共通に必要な資質・能力を次のとおり育成する。</p> <p>(1)「A表現」及び「B鑑賞」の指導を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。</p> <p>ア 造形の要素の働きを理解すること。</p> <p>イ 造形的な特徴などを基に、全体のイメージや作風、様式などで捉えることを理解すること。</p>

習指導要領における〔共通事項〕に関する記述の抜粋である。中学校美術も高等学校美術も、いずれも「(1)」の項目についての記述は同一であり、「A表現」及び「B鑑賞」の指導を通して「ア」「イ」に示された事項を指導することを示している。両者の「ア」を比較すると、「形や色彩、材料、光などの性質や、それらが感情にもたらす効果など」<sup>(7)</sup>と「造形の要素の働き」<sup>(8)</sup>という違いはあるが、意図している内容に大きな隔たりはないといえよう。同様に「イ」に関しても細かな違いは見られるが、示されている内容はかなり近似性が高い。このように、高等学校学習指導要領および中学校学習指導要領の〔共通事項〕の記述には深い関連がみられることから、中・高の美術学習の構造には、学びの連続性と系統性が高い質で担保されているといえる。

中学校美術の「ア 形や色彩、材料、光などの性質や、それらが感情にもたらす効果などを理解すること」の指導に当たって、具体的に理解できるように配慮しなければならない事項については、平成29年に公示された中学校学習指導要領の「指導計画の作成と内容の取扱い」において次のように示されている<sup>(10)</sup>。

ア〔共通事項〕のアの指導に当たっては、造形の要素などに着目して、次の事項を実感的に理解できるようにすること。

- (ア) 色彩の色味や明るさ、鮮やかさを捉えること。
- (イ) 材料の性質や質感を捉えること。
- (ウ) 形や色彩、材料、光などから感じる優しさや楽しさ、寂しさなどを捉えること。
- (エ) 形や色彩などの組合せによる構成の美しさを捉えること。
- (オ) 余白や空間の効果、立体感や遠近感、量感や動勢などを捉えること。

上記のように、指導することが求められる造形の要素などを具体的に示されている点は、今回改訂の重要なポイントであるといえよう。加えて、〔共通事項〕において示されているのは、用語や概念等を暗記するレベルの理解ではなく、「実感的な理解」である点も特筆される。前掲の(ア)～(オ)に示されているのは、いずれも造形の要素などの性質や効果を「捉える」ことを「実感的に理解」することが明示されている。例えば表現活動においては、「作品が完成すること」のみを学習のゴールとするのではなく、生徒たちが形や色彩、材料や光などを造形的な視点で捉えることを知識として習得することが求められていると考えられる。

以下、本稿においては中学校学習指導要領の「指導計画の作成と内容の取扱い」に示された(ア)～(オ)の事項を援用しながら、個別の鑑賞作品を例示して高等学校美

術の題材において〔共通事項〕を位置づけた指導のあり方について検討したい。

#### 4. 長谷川等伯筆「松林図屏風」を扱った鑑賞題材における〔共通事項〕を位置づけた学習課題の検討

##### 4.1. 長谷川等伯筆「松林図屏風」の概略と造形の要素

本章では、長谷川等伯筆「松林図屏風」(図1・2)を高等学校美術での鑑賞作品としてとりあげ、その指導に〔共通事項〕を位置づけることを試みたい。「松林図屏風」は複数の教科書<sup>(11)</sup>に作品図版が掲載されているため、高等学校美術での鑑賞対象として一般的かつ適当な作品であると考えられる。「松林図屏風」の鑑賞教材化を試みた先例としては、小倉千絵による中学校生徒に余白を理解させることに着目した論考<sup>(12)</sup>がある。

小倉の論考において言及されている、郡司亜也子の研究によると、「松林図屏風」が紹介されるようになったのは近年のことであり、昭和初期になってからのことらしい<sup>(13)</sup>。また郡司は、「松林図屏風」研究史の中で一定のコンセンサスを得ている点として、①松林図の表現技法と様式、②日本絵画史における位置、③等伯作品における位置、④制作背景、改変問題と旧状について<sup>(14)</sup>、の4項目に整理して示している。項目③・④についての議論は別稿に譲るとして、ここでは造形の要素や表現内容についての指摘がみられた項目①・②に着目したい。郡司による①・②に関する指摘のうち特に以下に抜粋した項目<sup>(15)</sup>は、高等学校美術の鑑賞において、生徒が実感的に理解する〔共通事項〕を検討する視点として重要である。

- ・ 湿潤な大気と明るい光の表現
- ・ 粗放な筆づかいと滋潤な墨調
- ・ 晩秋初冬から晩冬初春の季節感
- ・ 朝あるいは夕刻という時間
- ・ 煙霧の景

##### 4.2. 長谷川等伯筆「松林図屏風」をめぐる学習課題

高等学校美術において「松林図屏風」を鑑賞対象とした授業を展開するためには、同作品がもつ造形の要素や表現内容を抽出し、それらを意識しながら学習活動を構築していく必要がある。ここでは、中学校美術の「指導計画の作成と内容の取扱い」に示された(ア)～(オ)の事項と「松林図屏風」に含まれる造形の要素や表現内容とを照合し、それらを生徒が実感的に理解することができるようにするための学習課題について検討を試みる<sup>(16)</sup>。

##### (ア) 色彩の色味や明るさ、鮮やかさを捉えること

「松林図屏風」は墨の表情を生かして描かれた水墨画



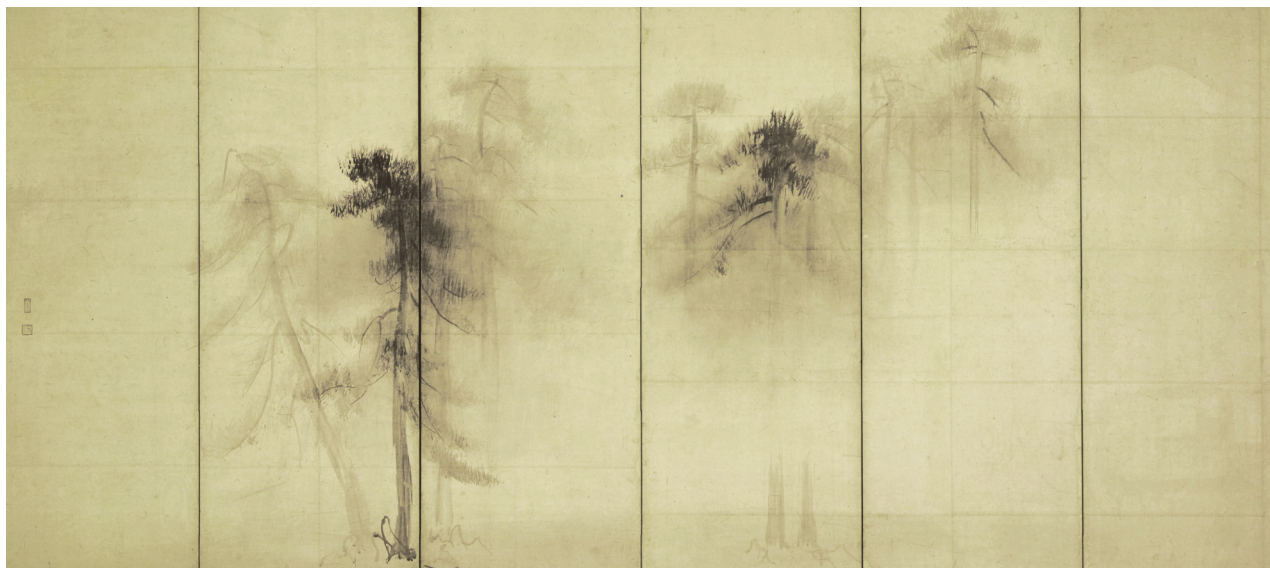


図1 長谷川等伯筆「松林図屏風」・左隻（東京国立博物館蔵），156.8×356.0cm Image: TNM Image Archives

であるため、描かれた松から色味や鮮やかさを直接的に捉えることは難しいかもしれないが、墨による濃淡の階調を捉えることを経験するには適切な作例であり、モノクロームの表現にみられる独特の美しさを味わうことを学習課題に設定することができる。また、年月を経た料紙の淡く微妙な色調を捉えることによって、繊細な色彩感覚を喚起することができるといえよう。

#### （イ）材料の性質や質感を捉えること

作品を特徴づけているのは、郡司の指摘にもあるように「粗放な筆づかいと滋潤な墨調」であるといえる。荒くたたきつけたような筆致で描かれた松葉、掠れて消え入りそうな幹や枝葉、それらの表現にふれることで、墨の幅広い表現特性を捉えることができる。例えば『『墨の表現カタログ』をつくろう』という提案により、生徒が「松林図屏風」に含まれる墨の表情を選んで再現し、レポートを作成するなどの学習課題が考えられる。作品を見るだけでなく、生徒が主体的に表現特性を分析することによって、墨の性質や質感を捉えることについての実感的な理解につながると考えられる。

#### （ウ）形や色彩、材料、光などから感じる優しさや楽しさ、寂しさなどを捉えること

先にふれた、「松林図屏風」に含まれる形や色彩、材料などの特性には、鑑賞者の感情にもたらす様々な効果がある。例えば、モノクロームの色調からは寂しさや穏やかさを感じたり、荒い筆致からは力強さや激しさを感じたりすることが想定される。前述の（ア）（イ）において提案した学習課題に加え、形や色彩、材料、光などから何を感じたのか、どんな気持ちになったのかについて生徒が話し合ったり文章化したりするなどの活動を通し

て、造形の要素が感情にもたらす効果について実感的に理解することが期待される。

#### （エ）形や色彩などの組合せによる構成の美しさを捉えること

形の組み合わせや構成に目を向けると、「松林図屏風」では、松が4つのまとまりとなって屏風の画面に配されていることがわかる。本来は屏風ではなかったものが改装されて現在の姿になっているとの指摘<sup>(17) (18) (19)</sup>があり、4つの松群の位置関係はオリジナルのものではない可能性がある。等伯による制作後、他者による改変があったとしても、あるいはその改変を含めて「松林図屏風」にみられる構成美は、特筆されるべきであろう。

モチーフを群として構成した美しさが特徴的な作例として、尾形光琳(1658-1716)による「燕子花図屏風」(国宝、紙本金地着色、六曲一双、根津美術館蔵)が想起される。光琳の「燕子花図屏風」も、「松林図屏風」と同様にカキツバタのまとまりが、いくつかの群として配置されている。生徒がこれら2つの作例を比較することによって、両者に共通する配置や構成についての考え方を見出すことを学習課題とすることなどが考えられる。

#### （オ）余白や空間の効果、立体感や遠近感、量感や動勢などを捉えること

「松林図屏風」では、墨で表現された松の木々が描かれており、それらの濃淡によって奥行が感じられる。樹高がほぼ同じでも、濃い墨で描かれた松と薄い墨で描かれた松という組み合わせも見られることから、それほど距離が隔たっていないことがわかる。その割には濃淡の差が顕著であるため、濃い墨で描かれた松と薄い墨で描かれた松の間には霧か霏などがかかっていると推定される。





図2 同・右隻（東京国立博物館蔵），156.8×356.0cm Image: TNM Image Archives

前節でふれた小倉による論考では、「霧は描かれていますか」<sup>(20)</sup>と問いかけることによって、中学生に「松林図屏風」の余白の意味を思考させている。小倉による授業実践は、「霧」に関する具体的な発問によって奥行の効果を捉えさせようとする、大変優れた実践であるといえる。

再び「松林図屏風」を観察すると、霧によって像が薄れて溶け込むように余白と同化しかけている松があり、像の濃淡差によって「手前の松」と「奥の松」という奥行のある空間が表現されているという傾向が見出される。また、左隻中央部の松に着目すると幹の中ほどが薄れて余白と一体化している箇所(図1)があり、「手前の松」のさらに手前にも霧が存在することが暗示されている。これらの点から、「余白の箇所には描かれるべきものがあるが霧がかかっている」という前提が形成される。しかし同時に、「余白の箇所には描かれるべきものがない」という可能性も否定されるものではない。このため、余白の箇所には何が描かれているのか(描かれていないのか)を鑑賞者が想像する余地が残されている。つまり、霧として表現された余白には、単に空気遠近法によって奥行を強調するという効果のみではなく、鑑賞者に「描かれていないものを想像させる」あるいは、「詳細な状況などが説明されないことにより、かえって立体的な空間の広がりを感じさせる」といった効果があるのではないだろうか<sup>(21)</sup>。

「松林図屏風」においては、松の露根によって地面の位置が示されていること(図1・2)等の他は、あえて空間についての説明が曖昧にされている。これと同様の傾向は、先に述べた光琳の「燕子花図屏風」にもみられる。「燕子花図屏風」では余白が金地になっているため水墨画と比較して装飾的な印象を受けるが、カキツバタの周

囲に水面等が一切描かれていない。本来描かれるべきものが余白によって表現され、空間についての説明が詳細になされていないという点は両者に共通している。2つの屏風を鑑賞して、「空間の説明がされていないのは、なぜだと考えるか？」等について議論することを学習課題にすることは、生徒に余白や空間の効果などを捉えるという見方があることを理解させる上で有効であると考えられる。

#### 4.3.〔共通事項〕を位置づけた学習課題についての考察

本章においては、「松林図屏風」に含まれる造形の要素や表現内容を中学校学習指導要領「指導計画の作成と内容の取扱い」に示された(ア)～(オ)の事項に照らし合わせながら高等学校美術における学習課題を設定することを試みた。作品の実見や課題設定のための検討作業を通して、筆者が気づいた2つの点を示しておきたい。

1 点目として、個別の作品を鑑賞することで5つの事項すべてを学習課題として設定するのではなく、作品ごとに特徴として表れている造形の要素などに焦点を当てることが望ましいという点があげられる。「松林図屏風」では余白や空間の効果、立体感や遠近感などを扱うことが適していると考えられる。この点は小倉の論考において、余白の独自性が教育内容として位置づけられている点に賛同するものである。

2 点目としては、実際に生徒が鑑賞する対象が教科書図版やスライド投影による画像である場合には、その大きさと画像の再現性の度合い等によって、実感的に理解できる事項とそれが難しい事項があるという点があげられる。例えば、作品に使用されている材料の性質や質感などを実感することは、小さな作品図版や映像からでは難しいことも想定される。また、彫刻などの立体作品に

おける量感や動勢などを捉えることについても、平面的な図版や映像からの情報では限定的な理解にとどまる場合もあると考えられる。図版や映像での鑑賞を前提とした場合、生徒にとっての実感的な理解が可能な要素などについて検討しておくことが必要ではないだろうか。

以上の点を踏まえると、学習指導案を作成したり作品を選定したりする前の段階において、(ア)～(オ)の事項に関連する造形の要素などを生徒が実感しやすい作品を指導者が把握しておく必要があると考えられる。

## 5. 結語

本研究の目的は、高等学校美術の学習において生徒が造形の要素などを実感的に理解するための〔共通事項〕を位置づけた指導のあり方を明らかにすることであった。前章までに述べてきたように、中学校と高等学校の学習構造には連続性があるため、中学校と同様の考え方によって学習課題の設定が可能であることが示唆された。今後は、『高等学校学習指導要領解説 芸術編』の刊行や授業実践に関する成果報告等の動向を注視していきたい。

一方で、指導者が造形の要素などが顕著に表れている作品を事前に把握しておくことの必要性も示唆された。従来の美術作品関連の文献・資料等は、美術史の時代区分等で整理されたものが一般的であった。それらに基づいて授業構築を行った場合、教育内容も美術史に関する知識に力点が置かれがちである。そこで例えば、「余白の効果」「材料の性質や質感」などのラベリングによる作品資料があると、教材研究に資するものになると考える。このような作品資料の作成については〔共通事項〕との対応を図る、学習課題や発問を組み合わせたものにする等、その構成も含めて今後の研究課題としたい。

## 付記

本研究は、平成29～30年度 科学研究費(基盤研究(C)、課題番号(17K04781)、研究課題名「主体的な美術科学習における言語的・身体的活動を通した思考の促進に関する実証的研究」、代表者：竹内晋平)の研究助成を受けている。

## 註

- (1) 中央教育審議会『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)』, 2016, p.28.
- (2) 同上書, p.30.
- (3) 同上.
- (4) 福田隆眞・福田哲郎・西村優子「美術教育における『共通事項』の実践的研究—小学校図画工作科・中学校美術科での実践を通して—」, 『学部・附属教育実践研究紀要』第10号, 山口大学教育学部附属教育実践総合センター, 2011, p.46.

- (5) 福田隆眞・足立直之・中野寿美・楊井朋子・阿部萌「中学校美術教育における共通事項の実践」, 『教育実践総合センター研究紀要』第44号, 山口大学教育学部附属教育実践総合センター, 2017, p.153.
- (6) 長谷川昇「『学習指導要領』の〔共通事項〕と「基礎・基本」に関する一考察」, 『横浜美術大学 教育・研究紀要』第4号, トキワ松学園横浜美術大学, 2014, p.152.
- (7) 文部科学省『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 美術編』, 日本文教出版, 2018, p.155およびp.156.
- (8) 文部科学省Webサイト「高等学校学習指導要領」『学習指導要領等』(更新日不明)  
<[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2018/03/29/1384661\\_6\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2018/03/29/1384661_6_1.pdf)>, 2018.4.24取得。
- (9) 表の作成に当たり、前掲(7)及び(8)を引用した。
- (10) 文部科学省『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 美術編』, 2018, p.157.
- (11) 具体例として、下記の高等学校美術教科書への掲載等があげられる。  
村上尚徳・横田学・安田淳 他『高校生美術1』, 日本文教出版, 2017, p.117.  
酒井忠康・伊藤有孝・上野行一 他『美術1』, 光村図書, 2017, p.82.
- (12) 小倉千絵「『余白』の理解を目的とした長谷川等伯『松林図屏風』の鑑賞教材化研究」, 『美術教育学』第27号, 2006, pp.107-119.
- (13) 郡司亜也子「松林図の特質と位置—研究史を中心に—」, 出光美術館編『開館三十五周年記念 長谷川等伯 国宝松林図屏風展』, 2002, p.10.
- (14) 同上論文, p.12.
- (15) 同上.
- (16) 造形の要素や表現内容をもとにした学習課題の検討に当たり、印刷等での再現に限界がある色調や質感、そして屏風を折り立てた際にもたらされる空間感などについて確認するため、下記の展覧会において「松林図屏風」の実見を行った。  
東京国立博物館, 特別展「名作誕生 つながる日本美術」(2018年4月13日-2018年5月27日)
- (17) 郡司, 前掲論文, pp.12-14.
- (18) 黒田泰三「松林図屏風の風景」, 出光美術館編『開館三十五周年記念 長谷川等伯 国宝松林図屏風展』, 2002, p.59.
- (19) 中島純司「作品解説」, 後藤茂樹編『日本美術絵画全集』第10巻(長谷川等伯), 1979, p.128.
- (20) 小倉, 前掲論文, p.115
- (21) 下記の論考においては、金地の余白が特徴的である俵屋宗達筆「舞楽図」(重要文化財, 紙本金地著色, 二曲一双, 醍醐寺蔵)を事例として空間表現についての検討を行っている。  
竹内晋平『主体的・対話的で深い学びの実現を意図した美術科学習の構築—俵屋宗達筆「舞楽図」(醍醐寺蔵)の鑑賞を事例として—』, 奈良教育大学出版会(E-book), 2018

## 図版出典

図1・2ともに、「松林図屏風」を所蔵する東京国立博物館より画像データの提供を受けた。

平成30年5月2日受付, 平成30年6月25日受理